

あ

● 県神社

木花開耶姫を祭神とし、縁結びや安産子育ての神として崇拝されている。県は古代諸国に設けられた朝廷の御料地のことであり、県主を置いて統治した。県神社はこの御料地の守護神として祀られたといわれる。

後に平等院の鎮守社とされたが、明治維新後、神仏分離で平等院の管理から離れた。6月5日の県祭りは、暗闇の中で行われる梵天渡御が有名。

6月8日に行われる大幣神事は平安時代の疫病退散を祈願した道饗祭で、古い神事の様式を残した珍しい祭りである。

● 朝日焼

平等院を望む朝日山の麓で、15代300有余年にわたり作陶が続けられてきた。初代陶作は慶長年間に開窯したと伝えられている。二代目は、茶人小堀遠州の指導の下「朝日」の銘を与えられ、遠州七窯のひとつに数えられた。

朝日焼は、土の中に含まれている鉄分などが、酸化と還元の微妙な領域にのみ発色する変化を「土の窯変」といい、その特長によって鹿背、燐師、紅鹿背と分けて呼んでおり、朝日焼窯芸資料館で見ることが出来る。

● 朝日山（朝日観音）

朝日山一帯は古くから神域とされ、離宮山と呼ばれていた。山頂部には、一宇の観音堂（朝日観音）が建てられ、その東側には菟道稚郎子の墓碑が立てられている。

この観音堂の建立時期は石塔の刻文に慶安5年とあることから、1652年と推定、当時雲水が宇治川に沈んでいた観音像を拾い上げ、観音堂を建ててお祀りしたものと伝えられている。山頂は平等院鳳凰堂の東方正面にあり、春秋の彼岸には山頂の朝日が鳳凰堂正面の円窓から丈六阿弥陀の白ごうを輝かせるといわれている。

● 天ヶ瀬ダム

昭和28年9月の13号台風は、宇治川の堤防を壊し、多くの家や土地に被害をもたらした。天ヶ瀬ダムは、このような水害を防ぎ、水道や発電にも利用できる多目的ダムとして昭和39年11月に完成した。

水道は、宇治市、城陽市、久御山町、八幡市に上水道水として供給し、発電はダム下流の天ヶ瀬発電所で最大92,000kw、上流の喜撰山発電所は天ヶ瀬ダム湖を下流調節池として、最大466,000Kwの発電を行っている。

● 安養寺

1538（天文7）年、天台宗の寺として羽戸の地にあった。応仁の乱の戦火を逃れて都から「奈良みち」を下った助心和尚が、里人に法然上人の念仏の教えを説き、天台宗の古寺を浄土宗に改宗した（1685）。

安土桃山時代になり、秀吉の宇治川左岸堤（太閤堤）構築によって宇治川の流れが変わり、1730（享保15）年の大出水により堂宇を流失、見切りをつけて、高所の大鳳寺の地に移る。明治維新にいたり、廃仏毀釈の鉄槌を受け、明治元年より10年の無住時代を経たが、四つの末寺を合併して、茶所宇治の茶師の帰依を受けて連綿と法灯を続けてきた。平成8年4月本堂改築落慶。

仏像は、平安時代「木造阿弥陀如来坐像」（本尊）、小野篁作の伝承をもつ（平安末～鎌倉初期）「地蔵菩薩立像」（地蔵堂本尊）は、いずれも宇治市指定有形文化財である。

このほか、黄檗様の木造地蔵菩薩立像（江戸時代）、阿弥陀如来立像（南北朝～室町）がある。また、恵心僧都筆の絹本着色、阿弥陀来迎図の他、釈迦三尊図、寺宝として「涅槃像」をはじめ、絵画、古文書多数あり。

● 厳島神社

日本三景のひとつ安芸の宮島の厳島神社と同じ主神（市杵島姫命）を祀る。昔はもう少し西にあり、古代、三室津と呼ばれる水辺集落があった頃、水の神として祀られたそうである。社の由来は、光仁天皇の777（宝亀8）年大中臣諸魚が雨乞いのために、勧請したと伝えられる。元禄年間（1688～1704）に現在地に移され、江戸時代後期は茶師の守り神として、また、製茶の村であった大鳳寺村民の厚い信仰を集めていた。

茶業を営むものにとって旱魃はまさに死活問題。「雨乞祈願成就」と刻まれた石灯籠に、庶民の切なる願いがうかがえる。

● 宇治上神社

1994（平成6）年、世界文化遺産に登録された宇治上神社は、明治維新までは離宮上社と呼ばれていた。境内正面の拝殿は鎌倉初期のもので、寝殿造りの様式を伝えており、特に縄破風といわれる手法を用いた屋根の美しさは格別である。本殿は、平安時代後期に建てられた、現存するわが国最古の神社建築である。境内にはその他、春日神社（重要文化財）や宇治七名水のひとつ「桐原水」がある。他の六名水が全て失われた現在、現存する唯一の湧き水である。

● 宇治川右岸に展開する茶畑について（4月中旬頃）

この辺りの茶畑では碾茶が栽培されている。宇治地方独特の栽培で、日本一の技術が伝えられている。玉露の栽培も全く同じである。一面に黒い幕が張られているが、この幕は「寒冷紗」といって太陽熱を吸収し太陽光を遮断して、柔らかい新芽

観光ポイント資料編

を育てる。よく見ると横に一枚と天井に二段、カーテン状に幕が張られ、上段は摘採の約二十日程前に一面に広げる「遮光度 50%」。その後十日程前に下段に二面を広げる「遮光度 90~95%」。そして1 芯5 葉位に成った時に全て手で摘み取る。玉露の摘採は碾茶よりも5 日程早く収穫する。40 年程前までは、木の丸太を立て、横に竹で網の目の様に升目を造り、その上に琵琶湖畔で採れた葦で簾を編み上に載せ10 日後、その上に藁を一面に広げ90%位まで遮光してソフトな新芽を育てた。今は約 30%位の労力ですむようになっている。なお碾茶の製法は、新芽を蒸してから炉で水分を乾かす。そして、葉と茎に分け葉の部分を臼で粉に仕上げる。玉露は蒸してから4 種類の揉機で揉みあげ針の様に乾燥しながら仕上げる。

宇治川とその支流に架かる橋

① 白虹橋

長さ 40,63m、幅 4m、昭和 32 年 6 月架設 ここから天ヶ瀬ダム堰堤を見上げる。

② 第一志津川橋

長さ 17m、幅 4.5m、昭和 40 年 3 月架設 志津川が宇治川に注ぐ。

③ 山吹橋

長さ 47m、幅 4m、昭和 30 年架設 山側に入り込んだ宇治川右岸に架かる。

④ 天ヶ瀬吊橋

天ヶ瀬ダムの下流にあり、春は桜、初夏は新緑、秋は紅葉が美しく、四季折々の風景が楽しめる。

長さ 53,9m、幅 2m の木製橋。1942(昭 17)年、散策道の整備に合わせて架設、両岸から鋼製ワイヤ 2 本で吊っている。老朽化のため 1996(平 8)年 3 月に改修。喧騒から離れた地での散策路として絶好のロケーション。

⑤ 第一金井戸谷橋

長さ 3,62m、幅 14.5m、谷川の水が宇治川に注ぐ。
欄干もなく、橋としての形を成していないので、見過ごしてしまう。

⑥ 松嵐橋

長さ 11,55m、幅 8,73m、平成 15 年 3 月架設 宇治川に注ぐ寺川に架かる。

⑦ 白川浜橋

長さ 10,55m、幅 8,73m、平成 15 年 3 月架設 宇治川に注ぐ白川に架かる。

⑧ 観流橋

関電宇治発電所の余水が宇治川に戻されるところに架かる。昔このあたりに茶室「観流亭」があったという縁で名づけられた。四季を問わず釣り客で賑わいを見せる。

⑨ 喜撰橋（喜撰茶）

長さ 32m、百人一首「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうじ山と人は言ふなり」の詠み人喜撰法師に因んで名づけられた。

○ 喜撰茶

「泰平の眠りをさます正喜撰 たった四杯で夜もねむれず」

幕末、鎖国の日本に突然やってきたアメリカの黒船。その衝撃を、ペリー提督が率いた蒸気船四隻と煎茶の茶銘「正喜撰」を掛け言葉にして、煎茶の覚醒効果も盛り込んで詠まれた。当時、この風刺歌の意味は即座に理解された。それだけ「喜撰」の名は、銘茶ブランドとして全国に知られていたことになる。また、偽物の喜撰も出回り、池尾産であることを「正喜撰」と銘して示したという。

「喜撰」の名は、平安の歌人「喜撰法師」に由来するもので、喜撰山の山腹には法師が隠棲し修業した洞窟が今も残されている。

⑩ 中ノ島橋

塔の島と橘島をつなぐ橋。

⑪ 朝霧橋

1972年宇治川右岸から菟道小学校に通う児童のため、長さ74m、幅3mの通学用歩道橋として完成。1981年宇治川の改修に伴って、橋の長さを95.5mに延長。橋の名前は市民公募により、229案のなかから選ばれた。新宇治橋に歩道がついたことから、通学路は変更され、現在は名実ともに宇治の観光名所の一つとなった。

⑫ 橘橋

長さ36m、幅2.5m、アーチを描く太鼓橋、静寂な趣が魅力。
橋の名は橘島に因む。

⑬ 宇治橋

646（大化2）年、奈良元興寺の僧道登によって初めて架けられたと伝えられ、わが国最古級の橋である。その由来が橋寺の「宇治橋断碑」に記されている。京都と奈良を結ぶ交通の要衝として、歴史や文学の舞台として登場し、また洪水による流失と再建をくり返してきた。

現在の宇治橋は、長さ155.4m、幅25m、4車線で両サイドの歩道は上流側

5m、下流側4m、総事業費約88億円で1996年（平成8年3月28日）に開通した。

宇治橋の特徴

- ・ **高欄と擬宝珠**…高欄は、国産桧を使用した安土桃山時代の様式。擬宝珠は1636（寛永13）年作のものをモデルとした形状。
- ・ **三の間**…左岸から三つ目の径間に位置することから名づけられ、古くは守護神橋姫をまつるために作られたと伝えられている。秀吉がここでお茶の水を汲ませたところといわれ、毎年10月の宇治茶まつりには、その故事が継承されている。ここからの眺めは絶景である。
- ・ **流木よけ**…伝統的漁法であった網代をつなぎとめる網代木をイメージした形。
- ・ **植栽・フットライト**…茶のまち宇治のシンボルである宝木（茶の木）を植栽、フットライトは石燈籠をイメージしたもの。
- ・ **銘板**…源氏香をモチーフにデザインしたもの（26枚）
江戸時代、**お茶壺道中**もこの宇治橋を渡って、宇治～江戸間を往復した。お茶壺道中は1633（寛永10）年、徳川3代将軍、家光のときに始まったといわれ、運搬する茶壺の増加に従って400人を越える大行列になったという。大名たちも道中で行き交うことがあれば、道をあけて先に通すことになっていた。まして一般民衆は、行列に土下座して迎えたという。
『♪すいすいすっころばし ごまみそすい 茶壺に追われて とっぴんしゃん 抜けたらどんどこしょ〜♪』の童謡からも当時の民衆の畏怖の思いが伝わってくる。毎年休みなく235回続いたお茶壺道中も、1867（慶応3）年、江戸幕府の終焉によってその役目を終えた。しかし、お茶壺道中が終わっても宇治茶の名声が衰えることはなかった。

⑭ 京滋バイパス宇治川高架橋

長さ279.5m、幅9.5m、（内2m歩道） 1988（昭63）年8月29日開通。

⑮ 隠元橋（隠元禅師登岸之碑）

1661（寛文1）年、江戸幕府の命を受けた中国僧隠元が、岡屋津の東、黄檗の地に「黄檗山萬福寺」を創建。建設の際に使われた材木も大阪から宇治川をさかのぼり、岡屋津の浜で陸揚げされたといわれている。「隠元浜」と呼ばれるようになったこの浜と、対岸の向島渡シ場町を結んだ渡舟は「隠元の渡し」と呼ばれ、250年以上営まれ、多くの住人や旅人が行き交うこととなった。その後1949（昭和24）年に「隠元の渡し」は木橋へと姿を変え、「隠元橋」と名づけられた。

観光ポイント資料編

4年後の1953（昭28）年、死者500人を越える南山城大水害によって流失。1956（昭31）年にコンクリート床版の橋を架橋、宇治市の東西を結ぶ橋として大きな役割を果たした。

ところが、歩道もない狭い道幅、変則な形の交差点、劣化・老化の進行などが問題となり、それを解決するため平成19年3月、総事業費39,2億円で新隠元橋が開通した。長さ195,5m、幅25m、4車線。（新たに両側3mの歩道設置）また、水はね防止の高機能舗装が採用された。

「**隠元禪師登岸之地**」碑は、隠元の出身地、中国福建省の花崗岩に刻まれ、亀趺の台座に乗り隠元の上陸時に飛びたったと伝えられる2羽の鶴、上部には雲龍が彫られている。

● 宇治市観光センター

社団法人宇治市観光センター（開館時間9時～17時）
休憩コーナーと宇治茶のサービスがある。

● 宇治市源氏物語ミュージアム

1998（平成10）年、宇治市が進める「源氏物語をテーマにしたまちづくり」の中核をなす施設として開館、源氏物語千年紀の平成20年には、更にフレッシュアップ。寝殿造をイメージした建物は、木々の緑と水に囲まれ、展示室を結ぶガラスの通路は、光に包まれている。館内は展示ゾーンと情報ゾーンに分かれている。

展示ゾーンには、光源氏の時代をイメージした平安の間、宇治十帖の世界が体験できる宇治の間、宇治十帖の主人公男女5名の愛憎劇を上映する映像展示室がある。

情報ゾーンには、図書館や、コンピューター画面上で平安装束を試着して記念撮影出来るコーナー、また、源氏物語クイズや性格診断テストなども楽しめ、喫茶、ショップも利用できる源氏ファン必見の施設である。

● 宇治市植物公園

山城総合運動公園と府民ふれあいの森に隣接する緑あふれる丘陵地に、平成8年10月にオープンした。現在、日本一を誇る正面の大規模立体花壇「花と水のタペストリー」には、46段の雛壇に3,675基のプランターを並べて絵模様が描かれる。起伏を利用した公園には、温室、フィールド合わせて1,000種以上の植物を見ることが出来る。

● 宇治市歴史資料館（宇治市文化センター内）

1984（昭和59）年、市民の文化芸術活動の拠点として開館された文化センター内にある歴史資料館では、宇治の歴史、地理、民俗、考古の各分野にわたる資料を収集、保存し、展示や出版物を通して調査研究の成果の普及に努めている。

宇治十帖古跡

① 橋姫の古跡（橋姫神社）

覆屋のなかに橋姫社と住吉社があり、橋姫神社をその古跡としている。どちらも水の神であり、縁切りの神と縁結びの神が一緒という珍しい神社である。

宇治川の川面を柴舟が行き交うのを見て、この地に暮らす二人の美しい姫君の淋しい胸の内を思い薫が、

「橋姫の心をくみて高瀬さす 棹のしづくに袖ぞぬれぬる」と詠む。

この巻から宇治十帖の物語が始まる。

② 椎本の古跡（彼方神社）

椎本の古跡正面に「式内彼方神社」が建ち、鳥居の正面奥には、諏訪明神の小社がある。不確かな出生のため、若くして求道の心をもつ薫が、仏道修業の師として仰いだ宇治の八宮の死を悼んで、

「たちよらむ蔭と頼みし椎が本 むなしき床になりけるかな」と詠む。

③ 総角の古跡（大吉山登り口にある大きな碑）

八宮の一周忌の仏前に供えられた名香の糸飾りに託して薫が、

「総角に長き契りを結びこめ 同じ所によりもあはなん」と大君への想いを詠む。

この薫の求婚に大君は応じず、中君と結びつけてしまう。不安定な匂宮と中君の仲を案じた大君は、心労のあまり病になり、薫に見守られて清らかな生涯を閉じる。

薫は悲嘆にくれ、その面影は消ゆることなく、やがて迎える新たな恋も、次第に悲しい色につつまれてゆく。

④ 早蕨の古跡

父八宮に続いて姉の大君まで喪い、独りになった中君の許に、宇治山の阿闍梨から春の便りにと、籠に入れられた蕨や土筆が贈られてきた。その温かい心に感動して「この春はたれにか見せむ亡き人の かたみにつめる峰の早蕨」と返歌する。中君は宇治の地を離れ、匂宮の待つ京へ移ってゆく。

揮毫は源氏物語研究家小野為三氏である。

⑤ 宿木の古跡

宇治川の左岸、喜撰橋から川上に約250mのところにある。匂宮の愛だけを頼りに都に上った中君であったが、夫匂宮は夕霧の娘六君と結婚する事になった。不安と悲しみにくれる中君を慰めようと、薫は宇治で手折った薦の紅葉を持ち帰り、彼女の許に届ける。紅葉には、

「宿りきと思ひ出でずば木の本の旅寝もいかに寂しからまし」の歌がつけられていた。揮毫は北川純三氏。

⑥ 東屋の古跡（東屋観音 鎌倉時代の石造聖観音菩薩坐像）

この巻で宇治十帖のヒロイン浮舟が登場する。

浮舟を宇治に迎えるため、三条の小家へ訪ねていった薫が詠んだ歌、
「さしとむる葎やしげき東屋のあまり程ふる雨そそぎかな」による。

⑦ 浮舟の古跡

薫によって宇治にかくまわれていた浮舟が、情熱的で衝動的な匂宮の強引な愛に惹かれ、まるで波に翻弄される小舟のように、あてどなく漂う自分の心を
「橘の小島の色はかはらじを この浮舟ぞ ゆくへ知られぬ」と詠む。

古跡は三室戸寺境内の最奥部にある。浮舟の運命にも似て一箇所に落ち着くことなく何度か移転を繰り返した。仏に帰依することになった浮舟には、最適の場所といえる。

⑧ 蜻蛉の古跡（宇治石に線刻された阿弥陀三尊、かげろう石）

宇治の山荘から姿を消した浮舟。薫にとって一番の想い人であるにもかかわらずはかなく死んだ大君、大君から託されながら匂宮の手に渡してしまった中君、八宮ゆかりのそれぞれの姫達とのはかない宿縁を嘆き、薫は
「ありと見て手には取られず見れば又 ゆくへも知らず消えし蜻蛉」と詠む。

（かげろう石）

石の正面には、定印を結ぶ阿弥陀如来像、右に観音菩薩、左に勢至菩薩の来迎阿弥陀三尊、左の隅には仏を拝む上臈の姿が線彫りされている。

平安時代後期の阿弥陀来迎信仰を表わしたものといわれる。

⑨ 手習の古跡（「手習の杜」と刻まれた大きな宇治石）

薫と匂宮の間で思い悩んだ浮舟が、入水しようと宇治川へさまよい出る。気を失い倒れていた浮舟は、横川の僧都に助けられる。洛北小野の里に連れて行かれた浮舟は、そのつれづれの生活を慰めるため手習をしながら、

「身を投げし涙の川の早き瀬を しがらみかけて誰かとどめし」と詠む。

揮毫は山田六左衛門氏。

⑩ 夢浮橋の古跡（夢浮橋ひろば）

薫が洛北小野の里に浮舟らしき女性がいることを伝え聞き、浮舟の弟小君に文を持たせる。「法の師とたづぬる道をしるべにて 思わぬ山に踏み惑うかな」と書かれた薫の文を見て、浮舟の心は千々に乱れる。だが、「昔のこと、思ひ出づれど、更に思ゆることなく、『怪しう、いかなりける夢にか』とのみ、心も得ずなん」と、意を強くして文を受け取ることを拒んだ。人の世の栄華も、男女の愛憎も、振り返ってみればただ夢のように消えてゆく。

揮毫は池本正夫氏、石柱は奥村源次郎氏

○ 夢浮橋ひろば

宇治十帖は、橋姫に始まり、夢浮橋におわる。この橋から橋への物語は、宇治橋の存在を抜きにしては、成り立たなかったといえる。

十二単姿で文をよむ**式部像**は、宇治ライオンズクラブから寄贈されたものである。

● 宇治十帖モニュメント

「源氏物語のまち」宇治十帖古跡を象徴するモニュメントとして、平成7年建立。匂宮が小舟で浮舟を対岸の小家に連れ出す場面をイメージしたもので、背面には源氏物語絵巻「橋姫」の巻の垣間見の場面が浮き彫りにされ、大君、中君、薫と登場人物が網羅されている。

● 宇治神社

古くは離宮明神・離宮八幡とも呼ばれ、明治維新までは離宮下社と呼ばれていた。本殿は、三間社流れ造り桧皮葺の社殿で、鎌倉時代初期の建築である。内殿には、菟道稚郎子の木造等身大坐像がお祀りしてある。

● 宇治の宝木「茶の木」

鎌倉時代に京都梅尾から明恵上人によって宇治の地に伝えられて以来、茶作りに恵まれた気候風土と茶に携わる人々のたゆまぬ努力によって、「お茶」といえば宇治市の代名詞になっている。

宇治市の伝統産業として、さらに発展することを願って、市の宝木とされた。

宇治陵

① 1号墳（総拝所）

このあたりには、近世には、広範な山林、茶園のなかに数百の墳塚が存在していたという。平安時代から藤原氏一門の墓地となり、1004（寛弘元）年、道長がこの墓地の近くに浄妙寺を創建して以来、この地は北家藤原氏の子孫を中心とする墓地として大いに利用されたが、藤原氏一門の分裂衰退とともに荒廃していった。

1877（明治10）年頃から、宮内省（現宮内庁）は、この墳墓群を調査して藤原氏出身の皇室関係者（天皇の後妃など）を主とする20名の陵墓（17稜3墓）として37ヶ所を選抜、国有化するとともに、墳塚を整備した。

しかし、どの墳墓が誰の墓であるかは解らず、1号～37号までの番号を付して一括管理している。ここ第1号陵は、宇治陵37ヶ所の総拝所と位置づけ、陵の前方に宇治陵に葬られて宮内庁の管理対象とされている20名の名が刻まれている。

1961（昭和36）年、浄妙寺の柱の礎石と伝える石材を用いて、藤原氏の主要人物名を列記した供養碑が建立されている。

② 32号墳（道長墓？） 33号墳

1027（万寿4）年、62歳で没した道長の墓は、長い間謎であったが、息子の頼通が、父道長の墓へ詣でた時〔1062（康平5）年〕の記述から、発掘された寺院跡の位置を考え合わせて、宇治陵32号陵の可能性が高いと想定されるにいたっている。なお、33号墳が伊子（藤原基房の娘）の墓らしいとの伝承がある。

③ 34号墳（冬嗣夫妻墓）

藤原冬嗣夫妻墓の伝承がある。冬嗣は、嵯峨天皇の蔵人頭となり、また、南円堂に施薬院を復興し、観学院を置いて、藤原一族の子弟の勉学場とした。

④ 35号墳（時平墓）

この墓は、古くから「時平塚」と呼ばれ、藤原時平の墓であるという伝承をもっている。時平は、基経の長子で、若くして参議、左大臣へと昇進した。

899（昌泰2）年、菅原道真も右大臣に栄進したため、時平らは、政敵である道真を退けて実権を掌握しようと、道真に、醍醐天皇を退け皇弟の齊世親王擁立を企んでいるとの嫌疑をかけた。そのため道真は大宰府に左遷され、2年後配所において悲運の生涯を閉じた。

こうして道真の追放には成功したものの、時平は道真の怨霊に悩まされ続け、間もなく病を得て39歳の若さでなくなった。

⑤ 36号墳（基経墓）

※許波多神社（木幡）の項参照

● 菟道稚郎子墓と太閤堤跡

榎島町から宇治川左岸の道に出ると、対岸に木が生い茂っている森が姿を見せる。これが宮内庁が指定した菟道稚郎子墓である。

豊臣秀吉が築いたと見られる護岸遺跡「太閤堤」は、木々が生い茂った陵墓と堤防の間で、平成19年9月に発掘された石積みの護岸遺跡で、全長約400m、石出を設けて川の流れを弱め、石積みが崩れないよう多くの松の杭を打ち込み、隙間に石を敷き詰めた高度な治水技術を示している。新たに庭園遺構も出土。

現在、国の史跡として文部科学省が指定。宇治市は「宇治茶と歴史・文化の香るまちづくり構想」を策定、史跡公園として整備の方針である。

● 恵心院（真言宗智山派）

平安前期、弘法大師の開基になる古刹で「龍泉寺」と称されていたが、度重なる戦火にあい、比叡山横川の恵心僧都源信によって再興された。現在は、江戸時代に造営された本堂と楼門のみを残している。本尊は十一面観世音菩薩立像（平安）、他に、阿弥陀如来立像（鎌倉）、四条宮寛子の念持仏歓喜天などがある。境内には多くの草花が植栽されている。

● エビス ジマジンジャ 蛭子島神社

水運、漁労の守護神として祀られた神社であるが、現在は「姫宮さん」と俗称されて祭神は女神であるとされている。因みに蛭子神は本殿に向かって右に並ぶ摂社のひとつ。

● 黄檗公園

この地は、1876（明治9）年、陸軍火薬庫建設のため接收されたが、平成2年7月、健康運動公園として再整備された。

● 奥ノ山茶園

茶園の石標に「奥ノ山宇治七名園」とあり、駒札には「宇治市名木百選 ちゃのき」と記されている。

600年も昔、宇治茶を好んだ足利三代将軍義満の命によって拓かれた宇治七名園は、「森、祝、宇文字、川下、奥ノ山、朝日につづく琵琶とこそ知れ」と歌にも詠まれた。「奥ノ山茶園」には樹齢400年を越すという茶木が残されており、昭和56年から品種改良し、厳選された成里乃、奥ノ山、朝日の品種が栽培され、今もなお宇治茶の名園の誇りを保つ一角である。

● 巨椋神社

この地に居住した古代豪族巨椋氏が、その祖神を祀ったことに始まるとされるが、平安時代になって、藤原氏の荘園「巨椋荘」となったために藤原氏の氏神、春日明神を勧請、春日社とされ、1877（明治10）年、式内巨椋神社と改称された。

祭神は、武甕槌神（タマツミカミ）、経津主神（フツヌシカミ）、比売神（ヒメカミ）である。

摂社に子守神社があり、由緒には「文徳天皇の皇子惟喬親王が子供愛護の大御心によって建立された」とあり、そのいわれは、昔三匹の大鳥がどこからともなく来て、子どもを悩ましていることを帝が聞かれ、惟喬親王に退治を命じられた。親王は諸国を回り、河内の渚の院にて大鳥を射止め、帰途小倉村中の小路に子守大神を祀られたのが創めとある。

● オリイ ジンジャ 下居神社

祭神は伊邪那美命（イザナミコト）、速玉男命（ハヤタヲミコト）、黄泉事解男命（ヨミコトトコタミコト）で、それぞれ創造と水と禊の神である。社殿は、三間社流造瓦葺、江戸時代。

古代に、付近の守護神として奉祀されたのがはじまり、時代の変遷に伴って種々の信仰に支えられ崇敬されてきた。木造男神坐像 女神坐像（鎌倉時代）一歴史資料館にて保管。

か

● 肩切地蔵

首のないお地蔵さんが「肩切地蔵」と呼ばれて祀られている。暮に夢中になって信仰を忘れた寺侍を、身をもって戒められたという伝説が残っている。

● 金草原と中国製青磁水注^{みずさし}

昭和 12 年、中国製青磁水注が、金草原バス停あたりの茶畑で出土している。（重要文化財、京都国立博物館）

この地は、浄妙寺との位置関係から浄妙寺を建立した際に、梵鐘を鑄造したところと推定されている。金草原・・・鉄や銅の溶鉱炉の残滓、金糞原が変化したもの。

● 亀石

「日本書紀」（垂仁紀）にも記されている由緒ある名石である。

垂仁天皇が山背の国に行幸の際、綺戸辺（かにはたとべ）という美人がいて聞いて矛で神意を伺い、その美女に出会えるなら途中で瑞相を示されよという、行宮に着いた頃に、大亀が川の中から現れた。天皇が矛を手にとってその亀を刺し貫いたところ、亀はたちまち石になってしまった。きっと奇瑞があろうという天皇の言葉通りに綺戸辺に出会い、後宮に召したというのである。

いまひとつの伝承は、この石の下に抜け穴があり、伏見城内に通じているという。秀吉が、万一の水対策として、宇治川の水を城内に引くために掘らせたといい、亀石はそのカムフラージュというもの。

● 勧請坂

白川地区の共同墓地からの急な下りを勧請坂という。勧請とは、地域に幸をもたらす神や仏を請じいれることである。昔は、白川地区の人たちにとっては、宇治の町に出る大切な道であった。

勧請坂は、また、「勘定坂」の意もあったらしい。昔、宇治や久御山へ年貢を納めたり、茶を商っての帰り道、この坂で銭勘定をしていたので、この名が付いたともいう。庶民の自然な気持を表わしていて面白い。

● 上林記念館

江戸時代、朝廷や幕府の御用茶師をつとめた上林春松家の長屋門を資料館にしたもので現在の長屋門は 1698（元禄 11）年の宇治の大火後に再建された。

館内には、製茶道具、豊臣秀吉や千利休からの書状、フィリッピンから渡来した「呂宋壺」など、宇治茶の歴史を物語る貴重な資料が数多く展示されてる。

● 願行寺（浄土宗）

開山は鎌倉初期、慈心房良空は木幡の里において「木幡派」と呼ばれる専修念仏を起こした。『応仁の乱で焼かれ寺を再興する時、寺の世話役5人が「伊勢の鈴鹿山へ仏を迎えに行きなされ～」という同じ夢を見、鈴鹿山で阿弥陀仏を背負った老人から仏像を受け取り後ろを振り向くと、その老人の姿は霧に包まれて見えなくなっていた』という**本尊阿弥陀如来像**にまつわる伝承があり、後に「霧がくれの弥陀」と呼ばれ広く信仰を集めたという。

また、**一夜彫りの不動尊**（市指定文化財、平安末期）といわれる不動明王坐像がある。『保元の乱で、平清盛は崇徳上皇方を破り、上皇は讃岐に配流となったが、その後清盛は崇徳上皇の軍兵が自分を攻めようとして木幡の関に差しかかるという悪夢に悩まされた。恐怖におののいた清盛は、工人に命じて一夜のうちに不動明王を刻ませ、木幡の関外に南面して安置し、軍勢の退散を祈願したという。』

● 旧家長屋門

宮林家は、江戸時代を通じて、公家、武家などへ碾茶を納入した宇治茶師三仲ヶ間の一家で平茶師を統括する土豪的性格を持っていたといわれる。

同様の長屋門のたたずまいを残しているのは、梅林家であり、大鳳寺村と呼ばれていたこの集落は、多くの有力な茶師が、軒を連ねていたという。

● 玉露製茶発祥の碑（玉露伝記 小倉茶業会）

1835（天保6）年、宇治小倉の木下吉左衛門の製茶場において、碾茶製造の途中「山本山」の六代目当主山本嘉兵衛が蒸された茶葉をかき回して試作した茶葉を江戸に持ち帰り、「玉の露」と名づけて諸侯伯に贈り、賞賛を得たことに始まる。

その後、小倉の江口茂十郎によって「玉露」が完成。この逸話を記念して碑が建立された。この碑の横に、江口茂十郎の功績を記念した「玉露発祥の碑」が立つ。

● 興聖寺（琴坂）

曹洞宗の宗祖 道元禅師による初開の道場、道元は、鎌倉時代に京都深草に興聖寺を開創したが、応仁の乱の兵火で焼失、廃絶。1648（慶安 2）年に、淀城主永井尚政公により伏見城の遺構をもちいて再興されたといわれている。

祠堂殿には、桧材漆箔造りの聖観音立像（宇治市指定文化財・平安時代）が祀られている。江戸時代はじめには、源氏物語宇治十帖の古跡（手習の杜）に祀られていたことから、手習観音と呼ばれている。

本尊は、道元自作と伝えられる釈迦牟尼仏、参道琴坂は、新緑、紅葉の美しい名所。また、茶祖といわれる栄西、明恵、利休の遺徳を偲び、毎年 10 月に行われる「茶まつり」には宇治橋三の間から汲み上げられた名水がここに運ばれ「**献茶の儀式**」が行われ、「**茶筌塚**」で茶筌の供養が行われる。茶筌塚の背面には裏千家家元千宗室氏による「**拋筌**」、表千家家元千宗左氏による「**謝茶**」が刻まれている。

● 伍町通り

開発に伴う詳細な遺跡調査の結果、平安時代後期ごろに設定されたと思われる平等院から一本の幹線道路が西方に延びていたことがわかった。その一部が、周りの状況は変わってきているが、伍町通りとして宇治の古道の名残をとどめている。

マンション横に、遺跡調査の解説版が設置されている。

● 許波多神社（木幡）

五ヶ庄大和田の柳山にあった神社を分祀して、木幡地区の産土神とされた（1161～63年頃）。現在は、田中神社と二社並祀されている。

本殿向かって右が許波多神社で祭神は天忍穗耳尊とされる。左隣は田中神社で、1909（明治42）年、木幡正中に鎮座していた社殿を遷座したもので、祭神は天穗日命で木幡地区東北部の集落の産土神である。

本殿の真向かいにあたる位置に、通称**狐塚**と呼ぶ**36号墳**がある。この小墳は平安前期に藤原北家の勢力を飛躍的に発展させた関白藤原基経の墓といわれている。

● 許波多神社（五ヶ庄）

祭神は、天忍穗耳尊、瓊々杵尊、神倭磐余彦尊で、五ヶ庄一帯の産土神である。当時は、萬福寺後方に柳大明神として祀られていたが、1876（明治9）年、陸軍火薬庫の増設により、現在地に移った。

本殿は三間社流造り、向背の臺股には、社殿に因んで柳と馬の彫刻がある。什宝として、「男女二神像」（平安）、「鉄宝相華孔雀銅象嵌舌鎧」（平安・重文）がある。

● 木幡緑道

JR奈良線に隣接する約290mの静かな遊歩道。かつては、旧陸軍宇治火薬製造所木幡分工場鉄道引込線跡の戦争遺跡である。



● 西方寺（無量山西方寺 浄土宗知恩院派）

この寺は、1624～44（寛永年間）の再興で、本尊阿弥陀三尊像の後に、伝承のある阿弥陀如来立像が祀られている。

『1180（治承4）年の頃、巨椋池の西南、淀一口の里に浮田水次郎という獵師が住んでいた。日頃の行いの悪さから人々は悪次郎と呼んでいた。ある日、一人の托鉢僧が彼の前に立ったが、水次郎は灼鉄をその僧の額に当てて追い払った。だが、その僧は怒る色もなく去っていったので、後をつけていくと、粟生光明寺に入った。水次郎が堂内に入ると、僧の姿はなく、安置してある釈迦如来像の額に灼鉄の痕が歴然と見えていた。それを見た水次郎は、自らの非行を悔い、仏門に皈依することを誓ったという。』

観光ポイント資料編

ある日、水次郎が川魚を採っていたとき、網に金銅の阿弥陀如来像がかかり、これを引き上げて家に置いたが、彼を戒めるようなことがいろいろ起こり、この像の靈驗あることに気づき、ひたすら信仰を強めたという。近在の人々は、彼の変身ぶりに感心して、いつの間にか、水次郎を弥陀次郎と呼ぶようになった。』

● さわらびの道

1991（平成3）年宇治市の「ふるさと創生事業」の一環として「紫式部文学賞・紫式部市民文化賞」の制定を機に整備された散策道である。

● 三十番神街道

奈良街道に沿って、東方に石田、木幡、五ヶ庄とつながる古道。天台宗、法華宗などに関わりの深い三十番神を祀る堂宇の存在が示唆されるが、現在は不明である。

JR奈良線

明治時代になって、宇治にも近代化の波が押し寄せ、鉄道の新設も宇治の産業の発展のために欠かせないものだった。京都と奈良を結ぶ奈良鉄道（現 JR 奈良線）は、1893（明治26）年に鉄道敷設の許可があり、全線（京都～奈良間41.8km）が開通したのは1896（明治29年4月）である。

開通当初は京都奈良間1日10往復、所要時間1時間50分、現在は快速で41分。明治38年2月関西鉄道に吸収合併、明治40年10月鉄道国有法に基づき買収、国鉄となる。

① 六地藏駅

1992（平成4）年10月22日開業 高架駅

② 木幡駅

1896（明治29）年1月25日開業、駅舎は、現在も国鉄時代の名残をとどめている。JRの駅名は「こはた」であるが、近隣にある京阪宇治線の木幡駅は「こわた」と、それぞれ異なる。また、駅周辺の一部地名には「こばた」と読むものもある。駅舎入口の柱に建物財産標がある。

建物財産標 駅 本屋 財産番号1001 明治29年1月

③ 黄檗駅

1961（昭和36）年4月21日開業

④ 宇治駅

1896（明治26）年1月25日開業。

大幅に増加する利用客への対応と、奈良線の部分複線化による列車増発、利便向上

観光ポイント資料編

のために、2000年8月に平等院鳳凰堂をモチーフとした橋上駅に改築された。
(駅前のモニュメント)

- ・お茶壺道中の**茶壺を模した郵便ポスト**
- ・茶摘み娘が「**茶摘み歌**」のメロディと共に時を告げる「**からくり時計**」

⑤ JR小倉駅

2001(平成13)年3月3日、奈良線の宇治駅～新田駅間の複線化と同時に開業した新しい駅。九州の小倉駅や近鉄京都線の小倉駅と区別するため、JRを冠している。駅の南側は、新興住宅地 南陵町がある。

⑥ 新田駅

1896(明治29)年1月25日開業。駅舎は、昭和中期のもので、木造瓦葺の平屋造り、国鉄時代の名残をとどめている。この駅が「新田」と名付けられたのは、淀藩の藩主永井尚政公が、1649(慶安2)年に、この地を開拓し、広野新田と呼ばれていたからである。新田駅開業を記念して植樹されたと伝えられる駅前のイチョウの大木、駅舎に寄り添うそうように立つコブシ、共にこの駅の移り変わりを百年以上も見続けてきた宇治市の名木である。

● 志津川集落

醍醐山の霊水を源として、その山並みの東側を南方へ流れる溪流、それが志津川で、天ヶ瀬ダムのすぐ下流で宇治川に合流するが、その合流点から北へ500mばかり入ったところに志津川集落がある。ここは、敏達天皇(578)斎宮に任ぜられた「菟道磯津貝姫」という姫皇女が、池辺皇子との仲を疑われて斎宮の任を解かれ、このあたりに隠棲したといわれている。また、源平合戦、「平家十家」の落武者が志津川東方の山中に隠れ住んでいたが、後に「十人衆」と呼ばれ、これが村内に「座」を構成して、村の政治や地域の和合につとめた「十老」組織の基盤を作ったとも伝えられている。

● 志津川浜の跡

志津川浜は、旧志津川村の唯一の開口部であり、村内産出の物産は、この浜から積み出されていた。この浜より上流の舟運は、不可能とされていたという。現在、瀬織津比咩と大山祇命が祀られており、そのかたわらに宇治名木百選のひとつ大榎(樹齢300年)が聳えている。

● 志津川福祉の園

18歳以上の知的障害の人たちの通所型福祉施設(平成8年開設 40名)
園生たちは、陶芸(コップ、小皿、花器、干支の置物など)、木工(ベンチ、家具など)、縫製(袋物、ティッシュケースなど)の製品製作や、さわらびの道の清掃などの受託事業にも取り組んでいる。

● 正覚院（長坂地藏堂）

1595(文禄4)年、僧離垢りくごが開いたと伝えられる浄土宗寺院。阿弥陀如来を本尊とし、表門の小堂には、鎌倉時代、三条仏師朝円作と伝えられる**毘沙門天像**

(府指定有形文化財)がある。『門左手にある**長坂地藏尊**は、昔、炭山の里で炭や薪を生業にしていた男が、木幡の途中の谷川で見つけた地藏を峠の道端まで運びあげてみたものの、それなり忘れてしまっていた。あるとき、牛を連れた男が、峠で一休みしようと道端の手ごろな石と思い、地藏さんに手綱を引っ掛けた。すると空はにわかに暗くなり、激しい風雨や雷に打たれ気を失ってしまった。やがてわれに返った男は、牛をつないだ石がお地藏さんであったことに気づき、手綱をといて地藏さんに平謝り、雨もやみ、空はうそのように晴れた。この話を聞き、木幡の人は、お堂を建てて大切にお祀りした。1877(明治10)年には境内に移されたという。』

● 正行寺（浄土真宗 西本願寺派）

本堂脇にある石像五輪の塔の残欠が楠木正行らの首級を埋めたところといわれる。1348(正平3)年1月、四条畷の合戦に敗れた正行は、弟正時らと共に自刃して果てた。首級を敵軍に奪われることを憂えた家臣の安間了意らは、木幡の下司、清水掃部助勝家を頼ってこの地に至り、首級を埋めて隠れすみ、塚の上に小堂を建て菩提を弔ったという。

● 松殿山荘（藤原基房の別業 松殿跡）

基房は後白河院に協力して反平家政策を展開し、平清盛に左遷(備前に配流)されたが、木曾義仲によって政界に復帰(娘 伊子は義仲の室となる)。義仲が敗れると政界から離れ、この地に86歳で亡くなる。伊子は未亡人となったが、後に久我通親と再婚、道元を生む。

1918(大正7)年、元中津藩の儒者、高谷宋範たかやそうはんおきな翁が樹立した山荘流茶道の公開道場として買受け、大正9年より大、中書院、茶席などを建立した。したがって、松殿当時のものは、土塁以外は残されていない。

● 浄妙寺跡（木幡小）

藤原道長が、一門血脈に連なる諸霊の埋葬地と定めた木幡の地に、死者の供養を目的として設けた大寺院である。

1005(寛弘2)年、まず三昧堂が完成し、同4年には多宝塔が建てられている。これらの主要な堂塔をめぐって、祠堂、客殿、鐘楼、僧坊など多くの建物が寺内に建立され、その周囲を塀で囲んだという。

このように、藤原一門の栄華に支えられた浄妙寺も、平安末期における藤原氏の衰退とともに、廃絶したと考えられている。

1967(昭和42)年、木幡小学校新設にともなう発掘調査によって、堂塔の遺構が発見された。

● 白川金色院跡（藤原寛子供養塔）

白川金色院は、藤原寛子によって1102年に建立されたと伝えられている。文殊菩薩を安置した本堂は、金箔がちりばめられていたので金色院と呼ばれた。

寛子供養塔は、高さ4mほどの花崗岩で造られ、基礎の背が低く横長の格狭間（こうざま）が入っている女性的な感じの層塔である。寛子が白川の地に金色院を建立して後半生の50余年を宇治で過ごし、大きな足跡を残したことが偲ばれる。

● 白川浜と蛍塚

白川が宇治川へ流入する辺りは、古くは白川浜と呼ばれ、舟着場があって白川へ物資を出入する拠点となっていた。道路を隔てた白川浜公園には、「蛍ヶ淵・蛍塚」と刻まれた碑が立つ。

季節になると、蛍ヶ淵と名付けられたこの辺りを中心に、無数の蛍火が幻想的な光の渦を描き出していた。とりわけ、毎年5月26日の夜は、平家打倒の夢も空しく無念の最後を遂げた源三位頼政と武者たちの亡魂が蛍と化して挑みあうと伝えられ、宇治の蛍合戦とさえ呼ばれて多くの遊客を集めていた。

また、「源氏蛍」の名を得た所以もここにあるといわれている。

● 誓澄寺（浄土宗・知恩院派）

鎌倉時代1313（正和2）年夢窓疎石が開創、その後室町時代1543（天文11）年に僧徳山が再興したと伝えられる。本堂脇壇の阿弥陀如来（平安）は、藤原期の作風を漂わせ、観音菩薩（平安）とともに宇治市指定文化財に指定されている。他に槇島合戦のとき、城内火中から運び出されたという伝承のある毘沙門天立像がある。左手に三叉戟（さんさげき）をもつ姿は、まさに城の守護神にふさわしい姿である。

た

● 「対鳳庵」（市営茶室）

数奇屋造りの本格的な茶室で、平等院鳳凰堂に相對していることから「対鳳庵」と名付けられた。お点前を楽しめる広間茶室、気軽に利用できる立礼席、織田有楽斎の「如庵」をモデルにした三畳半の小間からなり、香り高い本場の宇治茶と季節の和菓子を味わうことができる。

● 通圓茶屋

代々宇治橋の橋守として橋の長久祈願と道行く人々の無病息災を願って茶を商ってきた歴史的にも由緒のある「茶屋」である。現在の店舗は1672（寛文12）年に建てられた町屋の遺構を残す貴重な建築文化財である。

● 伝京極殿跡（師実別業跡）

京極殿とは、藤原師実（頼通の子）がつくった別業で 1094（嘉保元）年、関白を辞任後、もっぱら京極殿に住し、しばしば和歌の会などを行った。とくに 1096（永長元）年、京極殿における十種供養は有名である。1099（康和元）年、嫡男師通に先立たれてからは、孫の忠実の訓育にあたったが、2年後の 1101（康和3）年、60 歳で没した。

● 東海自然歩道

東海自然歩道とは、東京都の明治の森 高尾国定公園（東京都八王子市）から大阪府の明治の森 箕面国定公園まで続く山道を主体としたものである。

環境庁自然保護局（旧厚生省国立公園部）の主導で、各地の自然公園を連絡する歩道として 1974（昭和 49）年9月に完成した。総延長は、1697,2km にも及び道のりである。東海自然歩道の制定には、当時の日本が高度成長期の都市化や産業開発、公害の発生などによって失われた里山の自然を見直そうとする狙いがあった。

な

● ナカガワ胡粉絵具

明星町に入ると、突然白い貝殻の山が目に入る。この貝殻こそは貴重な宝の山でもある。明星町は、戦後新しく開発された住宅地であるが、かつては水車谷と呼ばれ、江戸中期から、水車を利用して、胡粉、金属粉、伸銅などの加工業が発達し水力が電力に変わった後も、しばらく存続していた。

現在は、明治 30 年創業の胡粉工場「ナカガワ胡粉絵具株式会社」のみが操業を続けている。胡粉の「イタボガキ」の貝殻は、数年間、野天積みにして塩分をとばして風化させ、身と蓋（高級品）を選り分け、いくつかの工程をへて、細かく粉碎して製品にする。

その用途は、日本人形の白いつややかな顔料、日本画用の白い絵具、工芸品の塗料、顔料などに広く用いられる。

江戸時代、イタボガキを瀬戸内海から巨椋池に運び、宇治川の菟道丸山の浜に荷揚げしたといわれる。昭和 30 年代を最後にこのイタボガキも手に入らなくなった。

胡粉工業立地の要因としては、水車を架設するのに適した谷筋に加えて、豊富な良質の水、さらに美術工芸の町、京都への近接性もその条件と考えられる。

また、胡粉製造で培った技術と伝統を活かして日本画の岩絵具も製造しており日本画絵具の製造においては、業界シェアの 80%以上を占めている。

● 中西伊之助旧居跡

宇治市出身のプロレタリア作家である伊之助は、1887（明治 20）年2月8日、京都府久世郡槇島町（現在の宇治市槇島）で生まれ、1958 年9月1日に亡くなっ

た。20代半ばで朝鮮に渡り新聞記者をしていた時、鉱山労働者の虐待を記事に書いて投獄された。この体験を後に「赭土に芽ぐむもの」に書いて文壇にデビュー。彼の業績を伝えるプレートは、槇島の旧居跡と、少年期を過ごした五ヶ庄の広芝の辻に顕彰会の手によって設置されている。

● 名木川散策路

名木川は、宇治市広野町宮谷と中島の境を東西に流れ、広野町付近では中島川と、大久保小付近では三軒家谷川と、近鉄大久保駅付近では大谷川とそれぞれ合流し、西流して久御山町に至って古川に合流する全長 3,500mの河川である。

名木川は萬葉の古歌にも詠われ、その名称は古代の郷名「那紀郷」水辺に群生していた「水葱」などに由来するといわれている。名木川散策路は、平成3年～平成7年にかけて宇治市によって整備され、市民の散策や憩いの場として活用されている。

● 能化院

寺伝によれば、802（延暦 21）年、坂上田村麻呂が延鎮法師を開基として建立、その後、道長の崇敬を受けて諸堂が整備、恵心僧都源信が自ら彫刻して当寺に寄せたのが、本尊の地蔵菩薩坐像であるという。現在の本堂は、1664（寛文 4）年の再興。平治の乱、承久の乱と、度々の兵火で諸堂は焼けるも、地蔵菩薩像は難を逃れ、火災厄除の地蔵尊として親しまれている。常盤御前の腰掛け石の伝承がある。

は

● 白山神社

790(延暦 9)年に、この地に疱瘡が流行した時に勧請された。後に金色院が造営されてその鎮守社となった。

拝殿（重文・鎌倉）は、宇治離宮から移されたとされている。

金色院が焼失した後も、里人は産土神として崇敬し、神事や行事を受け継いでいる。毎年 10 月 17 日深夜に営まれる「百味の御食」は、古くから継がれてきた行事で特異な形の神饌である。野と山の産物百種余りを集め、南瓜の中心には稲穂を、裾の方は茶の葉で飾り、中ほどに百種の野菜を串にさして供える。18 日の5時頃にはお下げして寺川に流す。

● 橋寺放生院

寺伝によれば、聖徳太子の命で 604 年、秦河勝が創建したと伝えられ、宇治橋が架けられた 646（大化2）年以降は、橋守の寺、橋寺と呼ばれるようになった。

鎌倉時代に洪水で流出した宇治橋が、西大寺の僧叡尊によって再興されたとき、宇治川中州の浮島に十三重石塔を建立し、盛大な放生会を営んだことから放生院と

名づけられた。境内には、宇治橋を架けた由来を刻んだ、日本最古の石碑といわれる「宇治橋断碑」（重要文化財）がある。

● 隼上り瓦窯跡（史跡）

飛鳥時代の瓦窯跡。発掘調査によって4基の瓦窯跡と工房跡、そして多量の瓦類や土器類が発見された。また、出土瓦を検討した結果、ここで焼かれた瓦は、7世紀初頭に蘇我氏が飛鳥に建立した豊浦寺で使われていたことが確認され、当時の仏教寺院建立の実像を究明する上で欠くことのできない貴重な遺跡であることがわかった。（昭和61年6月9日国の史跡指定）

● 広芝の辻（荒縄地蔵尊）

奈良街道にあるこの辻は、旧宇治郡宇治村の中心点とされ、さまざまな店舗が建ち並び、賑わったという。かつて街道をゆく人たちにとって重要な分岐点となっていたことは、辻の東南隅に立つ1888（明治21）年建立の道標からも知ることが出来る。

○ 荒縄地蔵尊（児童遊園内）

おこり（マラリア）にかかったら、石地蔵を荒縄で縛って平癒を祈願する風習があったことから、荒縄地蔵尊と呼ばれている。

● 平等院（表参道～かおりの道）

1994（平成6）年に「世界文化遺産」に登録され、鳳凰堂は10円硬貨のデザインとしても有名である。平安時代後期、藤原頼通が父道長の別業を寺院に改めたものである。鳳凰堂は、阿弥陀如来坐像が安置されている中堂と、左右の翼廊、背面の尾廊で成立っている。御堂と池が一体化された浄土庭園は史跡名勝庭園にも指定され、その優美な景観は、平安貴族あこがれの西方極楽浄土を具現したものといわれている。

○ 表参道（かおりの道）

石畳で整備された表参道を歩くと、お茶を焙じる香りに包まれる。両側の商店には、宇治茶の老舗をはじめ、茶そばなどの飲食店、抹茶スイーツのカフェ、和菓子店など約30店が並ぶ。2001年、環境省の「かおり風景百選」に認定された。それを記念して、雲と茶の香りをイメージした小林千晶（当時嵯峨美大生）のモニュメント「飛雲」が夢浮橋ひろばに設置された。

● 平等院前の宇治製茶記念碑

巨大な石碑は、1879（明治12）年、明治政府の殖産興業政策の一環として、横浜で催された第1回製茶共進会の製茶品評会で「宇治製法」が特別賞を受けた記念に建てられたもの。近くに茶業の改善に功績のあった辻利右衛門の胸像もある。

● 二子塚古墳

全長 105m、比高 10m 余の巨大な前方後円墳で、すでに埋没してしまった外濠（二重周濠）を含めると、東西、南北ともに 210m に及び、6 世紀前半に造られた古墳では、山城地方最大の大王級古墳である。

6 世紀初頭に継体天皇が、大和政権を倒して勢力を広め、久津川古墳群勢力に代わって、山城地方の盟主となった人物が埋葬されたと考えられ、継体陵といわれる今城塚古墳と形態が酷似していることが、注目されている。

● 札の辻（金ヶ辻）

茶舗永谷家は、宇治製法の煎茶の普及に貢献した永谷家の子孫の家である。その永谷家の前に「六地藏宿立場高札場跡」の石柱が立つ。この丁字形の辻が「札の辻」である。この辻の東は醍醐寺前を通して追分で東海道と合流、西は山科川を渡って伏見に至り、南は奈良街道である。従って、札の辻は奈良街道最初の宿駅であり、水運の港津としても大いに賑わったところである。

高札場のほか、馬借所、宿場人足の詰所、荷物運送の間屋（伝馬所）などがあり、江戸時代には、伝馬も常備されていた。

なお、鐘楼を設けて時刻を知らせたりしたため、「金ヶ辻」とも呼ばれてきた。

『平清盛の子重衡は、奈良東大寺を焼いたことから、平家滅亡後、奈良の僧兵たちの要求によって奈良へ護送される途中、日野の里に身を寄せていた妻に会うことが許され、束の間の別れを惜しむことが出来た。そのとき、護送役人は非情にも、この鐘で時刻の到来を告げて出立を急がせたという。重衡の妻は、近くの小高い丘に登って「想夫恋」の曲を琴で弾じ、遠ざかりゆく重衡を見送ったという。この丘は後に「琴弾山」と呼ばれていたが、今はない。

この哀話が語り継がれたことから、札の辻を「金（鐘）ヶ辻」と称することになったという。』

● 仏徳山（大吉山）

標高は 131.8m、登山道は東海自然歩道になっており、桜、山吹、もみじなどの木々が四季折々の風情を楽しませてくれる。展望台からは、宇治川、中ノ島、平等院をはじめ、宇治の街を一望することができる他、大阪方面も遠望出来る。

● 府立中の島公園（十三重石塔、宇治川先陣の碑）

○ 十三重石塔

高さ 15m のわが国最大の石塔で、1286（弘安 9）年、西大寺の僧叡尊が、朝廷の命により宇治橋の修復を行い、殺生禁断の思想で、魚霊の供養と宇治橋の安全を祈って建立した。

幾度かの洪水や地震により倒壊流失の難を受けたが、再建を繰返し、現在の塔は明治 41 年に再建されたものである。

○ 宇治川先陣の碑

平家物語、梶原景季と佐々木高綱の宇治川の先陣争いの故事にちなんで 1931 年に建立された。

碑の右側にある小さな石碑は、宇治川で争われた主要な合戦が刻まれている。



● 槇島公園

槇島城は、室町時代から安土桃山時代にかけて、槇島町藺場、大幡付近にあった城で、足利将軍家の家臣真木島氏が本拠としていたところである。この地は周りが川で囲まれた天然の要塞になっていたという。

1573（元亀4年）7月、織田信長に追われた室町幕府第15代将軍足利義昭は、京都から槇島城に居を移して挙兵するが、信長の猛攻に方途を失った義昭は、信長の軍門に降った。城は落城し室町幕府はこの地で滅んだ。

公園内には槇島城顕彰会によって「槇島城記念碑」が設置され、槇島合戦の内容を伝えている。

● 萬福寺

日本三禅宗のひとつ黄檗宗の大本山で、江戸時代 1661（寛文元）年 中国の僧隠元禅師によって開創された。建物は中国の明朝様式をとり入れた伽藍配置で、創建当時の姿を今日に伝えている。仏像では、大雄宝殿に安置されている十八羅漢をはじめ、布袋和尚像など中国の仏師范道生の作品が有名である。

境内の主要な建物 23 棟と 40 面の額、44 対の聯は重要文化財に指定されている。総門前、左右の龍目井の間に建つ**駒諦影園碑**は、茶種の蒔き方を宇治の里人に教えた明恵上人への感謝と、その功績を顕彰するため、1926（大正 15）年に宇治郡茶業組合によって建立されたものである。

山内の一角には、煎茶道の祖とされる売茶翁の像を安置する**売茶堂**がある。売茶翁は、仏教界の堕落への批判から、寺にあることも布施を受けることも潔しとせず、禅本来の精神を貫く生き方として、煎茶を売り歩くようになり売茶翁と呼ばれた。売茶堂のそばに**煎茶席「有声軒」**があり、ここに**全国煎茶道連盟の本部**がおかれており、毎年 5 月全国煎茶道大会がひらかれている。

また、境内には、菊舎の「山門を出れば日本ぞ茶摘み唄」の句碑がある。当寺の名物、中国風精進料理の「**普茶料理**」は、見た目の華やかさと共にヘルシーな料理として人気を呼んでいる。

万葉歌碑

古代から政略上、交通上重要な場所であった宇治周辺はそこを往来する多くの旅人や住民達にその風景の美しさから強い印象を与え、深い文学的感動を呼び起こしたのであろう。萬葉集にも多くの宇治周辺の地名が詠み込まれ今日に残されている。

観光ポイント資料編

現在の宇治市内には、その萬葉集に詠まれた歌の内から六基が、市民の請願により、平成4年3月、宇治市教育委員会によってゆかりの地に黒御影石で建立された。

① 秋の野のみ草刈り葺き宿れりし、

宇治の京の仮廬し思ほゆ

額田王

揮毫者 森 鵬父（書家 教育書道の会代表） 下居神社境内

大意「秋の野の草を刈って、その草で屋根を葺いて泊まった、宇治のみやこの仮小屋のことがなつかしく思われる」

② もののふの八十氏河の網代木に

いさよふ波の行く方しらずも

柿本朝臣人麻呂

揮毫者 古谷 蒼韻（書家 日展理事） 府立宇治公園橘島

大意「宇治川の網代木で一時停滞し、やがて行方知らずとなる波のように、滅びさった近江の都に仕えていた人々はどうなったのであろうか」

③ ちはや人宇治川波を清みかも

旅行く人の立ちがてにする

作者未詳

揮毫者 佐々木宏遠（書家 日展会友） 宇治市観光センター前

大意「宇治川の川波があまりにも清らかであるからだろうか。旅人たちは、ここからたち去りがたく思っている」

④ 宇治川は淀瀬無からし網代人

舟呼ばふ聲をちこち聞ゆ

作者未詳

揮毫者 山本万里（書家 日展会友） 宇治川右岸朝霧橋上流眺望台

大意「宇治川には、流れの穏やかな瀬がないらしい。網代で魚を捕る人の舟を呼ぶ声が、あちこちで聞こえる」

⑤ そらみつ 倭の國 あおによし 奈良山越えて 山代の

管木の原 ちはやぶる 宇治の渡 瀧つ屋の

阿後尼の原を 千歳に 関くる事なく 萬歳に

あり通はむと 山科の 石田の社の すめ神に

幣帛取り向けて われは越え行く 相坂山を

作者未詳

揮毫者 山本悠雲（書家 日展委嘱）

大吉山登り口

大意 「大和の国の奈良山を越え、山城の国の管木の原、宇治川の渡し場、滝つ屋の阿後尼の原と続く道を、いつまでも欠かさず、永久に通いたいと、山科の石田の神社の神に幣帛を手向けて祈り、私は越えて行く、相坂山を」

古来、「瀧つ屋」については、その場所をどこに比定するかが問題であったが、元暦校本には「瀧」ではなく「隴」となっていることを確認（木下正俊関大教授）。

「隴」の義は大岡であることから、これをタキツヤ（あるいはタキノヤ）と読む

のではなく、ヲカノヤ（岡屋）と読むべきとされた。この発見によって、場所が特定できなかった古北陸道がはっきりした。

⑥ 妹らがり ^{いまき}今木の嶺に茂り立つ

^{つまつ}孀松の木は ^{ふるひと}古人見けむ

作者未詳

揮毫者 西本大透（書家） 大吉山展望台

大意「妻の許へ今来たという名の今木の嶺に茂り立っている松。妻が夫の訪れを待つように、今も立っている松の木を、昔の人もきっと見たことであろう」

● 三室戸寺（明星山 修験宗聖護院派 西国三十三ヶ所第十番観音霊場）

寺伝によれば、770～80（宝亀年間）光仁天皇が宮中の奇瑞から志津川の上流に金銅千手観音像を得、これを本尊（秘仏）として寺を建立したのに始まる。

天正元年、槇島合戦の際に、信長の焼き討ちにあい荒廃したが、近世になって本堂が再興された。鐘楼のそばには、源氏物語宇治十帖の古跡「浮舟」が立ち、寺務所前には、芭蕉の句碑「山吹や宇治の焙爐^{ほいろ}の匂うとき」がある。

霊宝殿には、重要文化財の阿弥陀如来及び両脇侍、釈迦如来、毘沙門天がある。鎮守社十八神社は、室町時代の建立で、重要文化財に指定されている。横には、「平家物語」の橋合戦で活躍した一来法師を祀った小祠がある。

● 明星町

明星町は、昭和 47 年 6 月 9 日に誕生した大字で、菟道山田から志津川西山にまたがる雑木林と田を、昭和 46 年に宅地造成したのが始まりである。

町名の由来は、北東に明星山が聳え、近くの三室戸寺の山号が「明星山」と号していることに由来している。

● 向島渡シ場町（京都市伏見区）

隠元橋の西詰「渡シ場」だったことがそのまま町名となった。

約 350 年前、隠元禅師が対岸に萬福寺を開いた折、向島の住民に「ここを『隠元渡シ』と名付け、舟の運行をしなさい」といったとの伝承がある。

コンクリート橋が完成した 1949(昭和 24)年頃まで向島側の農家が渡しを受持ち、モチノキの大木の下に床几を出して、客待ちをしていたという。

● もみじ谷

白山神社の階段下を起点として、約 1 キロメートル、寺川の流れて沿って、宇治川畔の府道に出るまで続き、東海自然歩道の一部となっている。

白山神社近くと府道への出口辺は、古木や巨木が多く、樹齢 200 年の「いろはかえで」の群生や 250 年の「樅」の巨木は宇治市名木百選に認定されている。

この道は、秋の紅葉もよいが、新緑の頃も格別に美しい。



● 山城総合運動公園・太陽が丘

面積 100 ヘクタール（甲子園球場の約 25 倍）のわが国屈指の規模の総合運動公園である。各種運動競技場と、冒険の森や遊びの森を中心とした自然ゾーンと大きく二つのエリアに分かれている。

● 山本宣治の墓

「山宣（やません）」の名で親しまれる政治家、山本宣治の墓。正面には、「花屋敷山本家之墓」と彫っており、裏面には、家族碑銘と共に、「山本宣治 41 才、昭和 4 年 3 月 5 日没」とあり、山宣最後の演説の一節「山宣ひとり孤塁を守る、しかし淋しくはない…」が同志 大山郁夫の筆で刻まれている。毎年 3 月 5 日の命日には「山宣祭」が行われ遺徳をしのんで多くの有志がここに集う。

● 与謝野晶子歌碑

与謝野晶子は 1924（大正 13）年に夫の鉄幹と共に宇治を訪れている。源氏物語の魅力に惹かれていた晶子は、紫式部を師と仰ぎ、その現代語訳に渾身の熱情を注いだ。そして、五十四帖を五十四首の歌で詠んだ「源氏物語礼讃」によって歌人としての天分を発揮、宇治十帖の十首が彼女の真筆によってここに刻まれている。この歌碑は、晶子没後 50 年を記念して「みだれ髪会」によって平成 4 年に建立された。

● 頼政道

1180（治承 4）年、以仁王の平氏打倒の計画は事前に漏れ、王は園城寺（三井寺）に逃れたが、平氏に追跡され源三位頼政と共に奈良を目指した。その一行が園城寺から山科をへて、醍醐から宇治にぬけた間道は「頼政道」とよばれ、宇治市上水道平尾台ポンプ場前の公園に住民らの手によって記念碑が立てられている（平成 3 年）。その北側バス道路には、「頼政道」のバス停もある。